令和７年度

研究紀要

秋田県立由利高等学校

目　　次

巻頭言

校　長　　能美　佳央

1　研修報告

「発達の段階に即したプログラミング演習」を受講して　佐々木　勝則

「教職５年目研修講座（高等学校）」を受講して　星野　さくら

「実践的指導力向上研修講座（高等学校２年目）」　加賀谷　健

「実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）」　佐藤　好貴

「初任者研修講座」　藤澤　真樹

2　研究・実践記録

今年度理数科の取組

理数科運営委員会　太田　聖矢

今年度国際科の取組

国際科運営委員会　笹渕　夏子

酒宴に見る『宋史』列伝の人物たち

国語科　坂本　公正

教員が学び続けることの意味

校長　能美佳央

教員研修の重要性は、法的にも明確に示されている。教育基本法９条は、教員が崇高な使命を自覚し、絶えず研究と修養に励むことを求めている。また、教育公務員特例法 21 条でも、職責を果たすために継続的な研鑽が義務付けられており、教員が学び続ける姿勢は職務の根幹と位置付けられている。さらに、教員研修は「自主的研修」「職務命令による研修」「職務専念義務の免除による研修」の三つに分類され、多様な形で教員の資質向上を支えている。これらの制度は、教員が継続的に学び続けるための重要な基盤となっている。

一方、現代の教育現場は、教員不足や業務過多、働き方改革、教育の質の確保、多様な生徒や保護者への対応、さらには AI 活用への対応など、多岐にわたる課題を抱えている。これらは互いに影響し合い、教員の負担を一層大きくしている。こうした状況の中で生徒の学びを支えるためには、教員一人ひとりが必要な資質・能力を継続的に高めることが不可欠であり、そのためにも研修の充実が強く求められている。

約 20 年前、総合教育センターの研修員として１年間の研修に参加した。専門教科の研修に加え、自由なテーマで教職に関する実践研究に取り組むことが求められていた。他の研修員は「学習指導要領の変遷と今後」や「学校改善（学級経営）マネジメント」など所属校の課題に基づくテーマを設定していた。自由に選べると聞いていたのだが、私には『職員室の活性化』というテーマが与えられた。抽象度の高いテーマで研究の切り口を定めることに苦慮したが、最終的に「職員室における座席配置の工夫」に焦点を当てることにした。

県内の高校のみならず、県外にも調査の協力依頼を行い、約 50 校から回答を得ることができた。大規模校・小規模校、進学指導中心校・就職指導中心校、普通高校・専門高校など、学校の特徴に応じた座席配置の傾向があり、いくつかのパターンに整理することができた。座席配置が職員室の活性化に、直接結びつく明確な因果関係を示すことはできなかったものの、各校が職員間のコミュニケーション向上に向けて多様な工夫を行っている実態を把握することができた。研修終了後、現場に戻り、数年後に学年主任を務めた際、研究の“成果”を取り入れて座席配置の工夫を試みた。効果については当時の学年団の判断に委ねるが、少なくとも環境改善を意識する契機になったと考える。また、この研修をきっかけに実践研究への関心が高まり、齊藤憲三・山﨑貞一顕彰会や日本学術振興会科研費への応募、ＳＳＨ申請・指導などにも積極的に取り組むようになった。研修で得た視点が、その後の教育活動の幅を広げる大きな原動力となった。

現在の高校教育では「探究活動」の充実が求められている。生徒が自ら課題を設定し、情報を収集・分析し、協働して解決策を導くためには、教員が学びを支える伴走者としての役割を果たすことが欠かせない。探究的な学びは従来の知識伝達型とは異なり、教員自身が学び続ける姿勢を持つことがより重要となっている。そのため、生徒の主体的な学びを促す指導力の向上は、これまで以上に求められている。

教員研修は専門性を高めるだけでなく、教員同士が課題を共有し、互いの実践を高め合う貴重な機会である。研修で得られる知見やネットワークは個々の力量形成にとどまらず、学校全体の教育力向上にもつながる。継続的に学び続ける文化を育むことが、これからの教育を支える基盤となる。きっかけは人それぞれだが、まずは興味のある分野から一歩を踏み出すことで、新たな学びの道が開けるだろう。

1　研修報告

- 「発達の段階に即したプログラミング演習」を受講して
- 「教職５年目研修講座（高等学校）」を受講して
- 「実践的指導力向上研修講座（高等学校2年目）」
- 「実践的指導力向上研修講座（高等学校2年目）」
- 「初任者研修講座」

研修報告様式

令和７年度　講座番号Ｃ－３６

「発達の段階に即したプログラミング演習」を受講して

期　　日　：　令和７年７月２日（水）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　佐々木　勝則

研修の目標

小・中・高におけるプログラミングについて、基礎的な理解を深める とともに、実践を通じて知識と技術を身に付ける。

受講内容

10：00～10：10	開会行事・オリエンテーション
10：10～10：50	発達の段階に即したプログラミング演習について（講義）
11：00～12：00	ビジュアルプログラミングの演習（演習）
13：00～16：05	コード入力でのプログラミング演習（演習）
16：05～16：15	研修の振り返り・リフレクション

受講のまとめ

今回この研修に参加したのは、プログラミング教育がどのように行われているか興味があったことと、基礎的なプログラミングを学んでみたいと思ったからである。

「発達の段階に即したプログラミング演習について」は、子ども達がプログラミング教育を受ける意義についての講義であった。その中で、「プログラミング教育の目的はスペシャリストを育てることではなく『プログラミング的思考』を育むこと」というのが印象的だった。また、プログラミング演習ではスクラッチやマイクロビットを活用したビジュアルプログラミングや、プログラミング言語Pythonを使った基礎的なコード入力プログラミングを行った。いろいろと考えながらプログラミングをする場面が多かったので、とても有意義な演習だった。

専門外ではあるが、これからもプログラミングについて学んでいきたいと思う。

令和７年度　講座番号Ａ－１２

「教職５年目研修講座（高等学校）」を受講して

期　　日　：　〈Ⅰ期〉令和７年６月１９日（木）
〈Ⅱ期〉令和７年９月１２日（金）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　星野　さくら

研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

受講内容

Ⅰ期
・教育相談と人間関係づくり
・学校組織の一員としてーマネジメントの視点ー
・生徒の実態を踏まえた授業改善①
Ⅱ期
・発達障害のある生徒の理解と支援
・生徒の実態を踏まえた授業改善②

受講のまとめ

Ⅰ期の研修を通して見出した、自己の教科指導上の課題は「思考力・判断力・表現力等を育む授業展開の工夫」である。改善に向けた手立てとして、知識を活用して自他の生活の課題解決につながる方法を考える学習活動を行うことを重点にして授業を行った。Ⅱ期の研修で他教科の先生方と授業改善における成果と改善点を協議した。成果としては次の２点が挙げられた。1 点目は、情報収集・整理やまとめをする場面では、資料から読み取れる情報をもとに思考を深めることができていたこと。2 点目は、課題解決に向けた手立てが道筋立てて具体的に考えることができていたことである。改善点としては目標に即した評価規準を設定することが必要で、他教科の先生が実践していたルーブリック評価や自己評価、他者評価というものが大変興味深く実践したいと感じた。

昨年度、初めての卒業生を送り出し、一回りしてから再び１年生の担任としてスタートした１年だった。ある程度の余裕をもって学級経営や教科指導、生徒指導に取り組めると思っていたが、まさに十人十色で、目の前の生徒が違えば様子もまったく異なるのだということを痛感した。本研修では、様々な事例を交えた生徒との関わり方や支援の仕方を学び、私自身、日頃から意識している「寄り添う」姿勢に加え、実践の中で目の前の生徒からも新たな気付きを得ることができた。また、「生徒の実態に応じた」授業改善をするためには柔軟に対応できる指導力と個別に対応できる力が必要になると感じた。生徒の求めていることに積極的に耳を傾けながら、６年目も日々学びと実践を繰り返して成長していきたい。

令和７年度　講座番号Ａ－７

「　実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）　」を受講して

期　　日　：＜Ⅰ期＞令和７年５月２６日（金）
　　＜Ⅱ期＞令和７年９月１９日（金）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　加賀谷　　健

研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

受講内容

Ⅰ期
10:15~11:40　保護者対応と連携
11:40~11:50　社会に開かれた教育課程の実現に向けて―地域人材と資源の把握と活用―
12:50~14:00　学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―
14:15~16:05　授業づくりの充実に向けて①
Ⅱ期
10:10~16:05　授業づくりの充実に向けて②

受講のまとめ

本研修を通して、教職２年目という立場において、日々の教育活動を振り返りながら、自身の課題を見つめ直す貴重な機会となった。

Ⅰ期では、まず保護者対応と連携について学んだ。保護者との関係づくりにおいては、日常的な情報共有の積み重ねと、教員としての姿勢や言葉の選び方が信頼関係の構築につながることを再認識した。また、社会に開かれた教育課程の実現に向けては、地域人材や地域資源を把握し、教育活動に生かす視点の重要性を学んだ。学校内にとどまらず、地域と連携することで、生徒の学びがより実社会と結びついたものになることを理解した。さらに、学校組織の一員としての在り方について、学校教育目標とホームルーム経営の関連性を通して考える機会を得た。ホームルームは学級経営の基盤であり、学校全体の教育目標を踏まえた指導を行うことが、生徒の成長につながることを改めて実感した。授業づくりの充実に向けた講義では、授業のねらいを明確にし、生徒の実態を踏まえた指導方法の工夫が必要であることを学んだ。

Ⅱ期では、授業づくりに焦点を当て、より実践的な内容について学習した。教材研究の重要性や評価の在り方、生徒の主体的な学びを引き出す発問や活動の工夫について他教科の授業実践とも比較しながら理解を深めることができた。日々の授業改善に直結する内容であり、今後の実践に生かしていきたい。

本研修を通して、教員としての役割を改めて見つめ直すとともに、学校教育目標を意識した教育活動の重要性を強く感じた。今後は、研修で得た学びを日常の学習指導やホームルーム経営、生徒指導に生かし、より実践的で質の高い指導力の向上に努めていきたい。

令和７年度　講座番号Ａ－７

「　実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）　」を受講して

期　　日　：＜Ⅰ期＞令和７年５月２６日（金）
　　＜Ⅱ期＞令和７年９月１９日（金）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　佐藤　好貴

研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

受講内容

Ⅰ期
10:15~11:40　保護者対応と連携
11:40~11:50　社会に開かれた教育課程の実現に向けて―地域人材と資源の把握と活用―
12:50~14:00　学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―
14:15~16:05　授業づくりの充実に向けて①
Ⅱ期
10:10~16:05　授業づくりの充実に向けて②

受講のまとめ

昨年度の初任研を振り返りつつ、２年目としてどのような事に意識を向けて日々の教育活動を考える機会となった。

Ⅰ期では、保護者との連携や保護者対応、社会に開かれた教育課程について、学校組織の一員としての振る舞い、授業づくりについての研修を受けた。教師にとって困った保護者は何かに困っている保護者であることが多く、日頃の情報共有と信頼関係の構築が重要になると再確認した。保護者に安心感を持ってもらい、協力してもらえるようにしていきたい。社会に開かれた教育課程への実現に向けて、地域との連携・協力をしながら学校教育を行うことが必要不可欠である。また、地域の人的・物的資源を活用する事が重要である。授業づくりは、ひとりひとりを主語にした授業を作っていくことで主体性を引き出すことができると再確認した。そのためにも、指導の個別化と学習の個別化を意識した授業づくりを日々考えることが必要であった。

Ⅱ期では、より実践的な授業づくりについて研修を受けた。深い学びができるようにどのような工夫をしていくか、個別最適化を図りながら生徒一人一人にあった学習を考える機会となった。それぞれの先生方の工夫や時短を考えた濃い教材研究など学びの多い時間となった。今後の授業で実践できそうなことが多く、取り入れていきたい。

本研修を通して学んだことを日々の教育活動に取り入れつつ、教員として学ぶ姿勢の重要性を改めて理解できた。これからの教員人生に生かし、指導力を向上させていきたい。

令和７年度　講座番号　Ａ－３

「初任者研修講座（高等学校）」を受講して

氏　　名　：　藤澤　真樹

研修の目標

教員としての心構えを身につけるとともに、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての基礎的・基本的な指導力を養う。

受講内容

[総合教育センター主催]
・初任者研修講座：教科等指導力、マネジメント能力、生徒指導力、教育課題への対応
[高校教育課主催]
・AP 研修（宿泊）：あきたアドベンチャープログラム（ＡＡＰ）
・授業研修（秋田明徳館高等学校）：生活体験発表大会参観、授業参観、秋田明徳館高等学校長講話
・特別支援学校訪問：授業参観、授業体験、教育専門監講話

受講のまとめ

「初任者研修講座（高等学校）」を受講して、教員としての心構えを身につけるとともに、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての基礎的・基本的な指導力を養うことができた。

高校教員に求められる資質の一つとして教科指導力が重要であると考えている。世界史探究において「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、指導内容を精選するとともに、指導と評価を一体的に捉えた授業づくりが重要であると実感した。世界史探究では、多くの歴史的事象や用語を扱うため、知識を網羅的に説明する授業になりがちである。私自身も理解させたいという思いから説明しすぎてしまい、生徒が史資料を基に自ら気付き、考える余地を十分に確保できなかったことが大きな課題であったと反省している。授業ですべてを教えるのではなく、学習のねらいに照らして指導内容と問いを精選し、生徒にどのような力を身に付けさせたいのか、何ができるようになるかを明確にした上で授業を構成することが必要であると考えるようになった。初任者研修で学んだことを今後の教育活動に生かし、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりに努めていきたい。

初任者研修の一環で「特別支援学校訪問」があり、特別支援教育に対する理解を深めることができた。授業体験では高等部の生徒６名で編成された「ビルクリーニング班」から実際に商業施設等で行われている清掃のやり方を指導していただいた。生徒たちはお互いに声を掛け合い、確認しながら清掃をしていた。私の清掃の至らないところにも気づき指導してくれた。授業体験前に小学部の授業参観をしていたので、同じ生徒ではないが高等部の生徒の成長に驚かされた。自立に向け準備ができていると感じた。現在私は２年Ｂ組の担任をしている。とても明るく元気で楽しいクラスである。彼らも一年後には卒業し社会に参画する。ただ進学や就職をするだけでなく、自立し社会に貢献できる大人になってほしいと願っている。彼らが三年生として日々の学校生活で成長し、「責任」や「協働」といった意識をもてるよう指導していきたい。私自身も生徒と共に成長できるよう初心を忘れず教員生活を送りたいと思っている。

2　研究・実践記録

今年度理数科の取組

今年度国際科の取組

研究発表　酒宴に見る『宋史』列伝の人物たち

国語科　坂本　公正

今年度理数科の取組

理数科運営委員会　太田　聖矢

１.はじめに：次世代の科学技術人材育成に向けて

本校理数科では、科学やテクノロジーの進展と社会の変化に対応できる柔軟な思考力と新しいアイディアを生み出す想像力の育成、探究的な学習活動をとおして、自ら学び、自ら考え、提案できる人材の育成をめざしている。昨年度から、文部科学省の「DX ハイスクール・ラボラトリー事業」の採択を受け、ハイスペック PC や実験機器等の設備を整備することができた。今年度は従来の強みであった「地域・大学との密接な連携」に加え、デジタル技術を標準的な研究手法として取り入れることで、探究活動の質を一段上のフェーズへと引き上げることを目指した。本報告書では、理数科運営委員会が主導した今年度の多角的な取組を総括し、今後の展望を示すものである。

２.理数探究について

（１）秋田県立大学との連携について

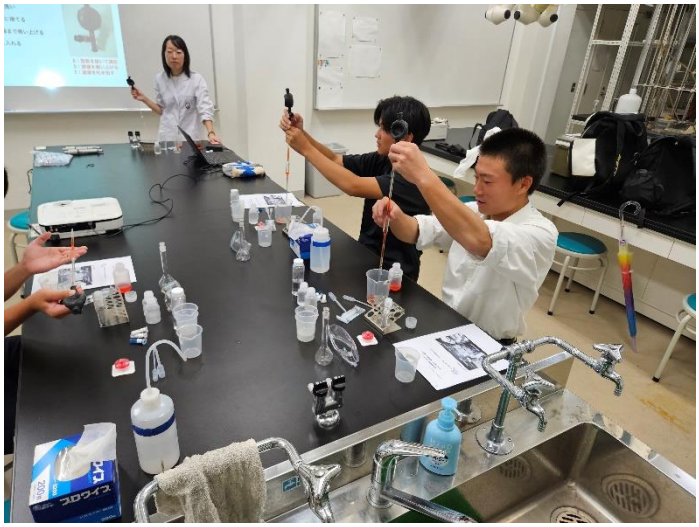
「理数探究」は、探究の過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を身につける科目である。生徒自らが課題を設定し、主体的に探究の過程を遂行し、探究の成果について報告書（論文）を作成させるものである。各班の探究がより深いものになるために秋田県立大学からアドバイザー教員を配置していただき、大学の研究設備を使用したり、研究の相談やサポートをオンラインで行ったり、各班の疑問点や研究の方向性についてアドバイスをいただくことができた。また、校内発表会の際に講評者として先生方をお招きし、丁寧なアドバイスをしていただいた。これにより、単なる技術的な助言に留まらず、研究の論理構成やデータの統計的な有意性など、専門家ならではの厳しい視点でのフィードバックが行われ、論理的思考力と専門的コミュニケーション能力を飛躍的に向上させた。今後も有効的な大学連携の在り方を深めていきたいと考えている。

（２）サイエンスプログラムの実施　令和７年９月２日～９月４日

サイエンスプログラムは、学問の多様性と専門性に触れる貴重な機会である。今年度も秋田県立大学、秋田大学、および地域フィールドでの実践を通じ、多層的な学びを展開した。

大学の高度な研究設備や、専門教員による直接指導は、生徒にとって最大の刺激となっている。初日の秋田大学では、総合環境理工学部でのサイエンスラボ、教育文化学部での体験授業を行い、数学・物理・化学・生物の知識を活用し、実験・観察を体験することができた。

午後は学部説明があり、生徒も関心をもって説明を聴いていた。



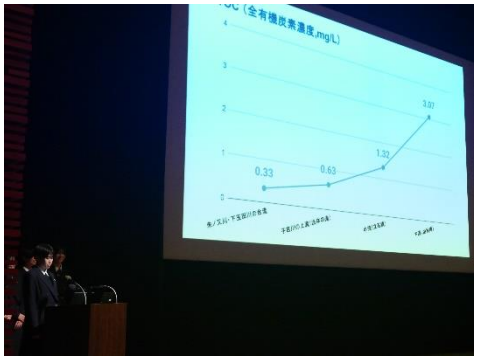
２日目には鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会の指導の下、フィールドワークによる実証的探究 本校の立地を活かし、鳥海山周辺の豊かな自然環境を巨大な実験室と捉えた調査活動を実施した。地質調査では露頭の観察を通じて数万年前の地殻変動に思いを馳せ、地域の河川に生息する水性生物の観察を行うことで環境保全への意識を高めた。これらの活動は、教科書に記載された知識を「生きた知恵」へと昇華させるプロセスとなっている。

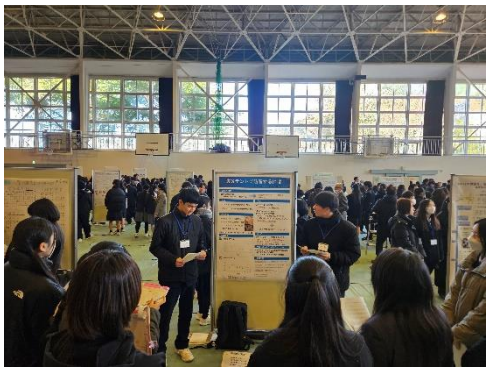
３日目の秋田県立大学では施設見学と探究活動の指導などを行っていただいた。特に秋田キャンパスは地理的に直接指導が困難なため、直接アドバイザー教員に指導していただくことは生徒にとって良い機会となった。

３．外部発表会への参加による知見の拡大

研究成果を校内に留めず、広く社会や他校へ発信することは、客観的な評価を得るために不可欠なプロセスである。

秋田県理数科合同研修会では、他校のハイレベルな研究に触れることで、生徒たちは自らの研究の立ち位置を客観視することができた。同世代との質疑応答は、教員からの指導とは異なる気づきを与え、研究をブラッシュアップするための大きな原動力となった。また、宮城県多賀城高等学校で開催された発表会への参加は、科学技術と社会の接点を再認識する機会となった。特に理数的な視点からアプローチする研究は、自分たちの学びが社会に貢献する可能性を秘めていることを実感させ、理系人材としての倫理観と社会的使命感を養った。





４．DX ハイスクール事業の活用と情報リテラシーの育成

今年度の最大の特徴は、DX ハイスクール・ラボラトリー事業で整備した機器等の活用しである。昨年度配備されたハイスペック PC や各種計測機器等を用いた実験により、校内でも米に含まれるアミロース分析を行うなど、高度な探究活動に取り組めた。また、理数科へ進級予定の 1 年生に対してマイクロビット講座を理数科教育の入り口として計画した。これは、単にプログラミングを学ぶためのものではなく。温度、加速度、光といった自然界の情報をセンサーで捉え、それを論理的に処理してアクションを起こすという「データ駆動型探究」の基礎を学ぶためのものである。この経験が、2 年生以降の理数探究における強力な武器となることを期待している。

５．研究の持続性と深化 ―「終わり」のない探究へ―

今年度の理数探究における最大の転換点は、12 月の校内発表会を単なる「成果報告の場」ではなく、次なるステップへの「中間ゲート」として位置づけたことである。多くのグループが、発表会での質疑応答やアドバイザーからの指摘を反映させるため、3 学期以降も継続して研究を続けている。追加実験や再解析を行う姿は、一時的なイベントとしての授業を超え、主体的な研究活動へと進化していることを示している。

今年度は物理班の１つの班が齋藤憲三・山﨑禎一顕彰会の研究助成をいただき、１年間実験を行った。高校生の研究が外部機関から資金援助を受けるという事実は、その研究の可能性が高く評価された証である。この班は助成金を活用し、通常の学校備品では購入できない高度な実験用具を揃えることで、より精密なデータ収集に挑んでいる。資金を管理し、計画的に研究を遂行するプロセスは、将来の研究者に求められる「プロジェクトマネジメント能力」の育成にも繋がっている。

６.今後の展望

今年度の由利高校理数科は、大学連携の強化、DX ハイスクール・ラボラトリー事業の活用によって、これまで以上に充実した取組につながった。しかし、設備や体制が整うことは手段に過ぎない。重要なのは、生徒自身が目の前の事象に対して「なぜ？」と問い続け、失敗を恐れずに仮説と検証を繰り返す姿勢である。来年度は、これらの取り組みをさらに定着させるとともに、1 年生から 3 年生までの「探究のバトン」をよりスムーズに繋ぐためのシステムを構築していきたい。地域に根ざし、かつデジタル技術を自在に操る「科学の担い手」を育成するため、理数科運営委員会は今後も全力で支援を続けていく。

今年度国際科の取組

国際科運営委員会
笹　渕　夏　子

昨年度に引き続き、本校は「オンライングローバルラーニングプロジェクト」の指定校４校のうちの一つとして、２年生国際科を中心に様々な教育活動を実施した。台湾への修学旅行や９月に行われたグローバルチャレンジなど従来の取組に加えて、今年度の探究活動では「ローカル」の課題・自分たちが住む地域について調査したり、課題解決のための具体的な行動をしたりすることで、持続可能な地域社会の構築のために貢献できる人材育成についても強化して取り組んだ。大学教員や地域の人材による授業・講演、ワークショップ等の活動をより積極的に実施することで、生徒の地域理解と主体的な学びに成長が見られた。

１．国際交流活動について

○６月２４日　ハンガリー　エドヴェシュローランド大学　留学生との交流プログラム
○１１月７日　私立大同高級中学（台湾）との交流プログラム
○１２月１０日　対日理解促進交流プログラム　カケハシ高校生オンライン交流プログラム第１回
○１月２４日　　対日理解促進交流プログラム　カケハシ高校生オンライン交流プログラム第２回

（1）ハンガリー　エドヴェシュローランド大学　留学生との交流プログラム

秋田県立大学に来校していたエドヴェシュロラーンド大学（ハンガリー）の学生との交流プログラムでは、ディスカッションを通じて日本とハンガリーの高校生活について比較し、共通点や相違点について認識することができた。またミニ・プレゼンテーションに挑戦し、生徒が選んだ好きなトピックについてスライドを用いながら発表した。由利高祭にも来校してもらい、生徒が校内を案内してまわった。ハンガリーの大学生たちにとっては、日本の学校祭を初めて経験する機会となった。エドヴェシュローランド大学の学生たちとの交流は昨年度に引き続き２度目であり、大学で日本語を学んでいる学生たちの姿は外国語学習者のロールモデルとして、生徒の印象に強く残ったようである。大学生たちの進路選択等についてなど、さまざまなトピックについても直接聞くことができ、生徒が自分自身の生き方や進路選択についても考えることができた。

【生徒の感想】
・グループ交流の時、ハンガリーの大学生は無言の状態がほとんどなくて、私たちも積極性を見習いたいと思った。一つの質問をきっかけにして、会話をどんどん広げていくことができるようにしたい。
・言語の全く違う遠い外国に来て、日本人に囲まれても、物怖じせずに堂々と話している大学生たちはすごい。
・好きなことを学んで、自分の力を伸ばそうとする姿勢がとても素敵だと思った。
・自分から質問をして相手のことをより知ろうとしたり、自分についても Yes/No で終わらせずにもっと

知ってもらったりすることが大切だと思った。

（２）私立大同高級中学（台湾）との交流活動

昨年度に引き続き今年度も台湾修学旅行中に、私立大同高級中学との交流活動を実施することができた。今年度は交流活動の内容をより発展させ、自己紹介や学校生活についてのトピックにプラスして、高齢化社会に役立つ日本や台湾発のアプリや発明品についてお互い紹介しあい、さらに今後将来どんなものがあったらいいかについて、グループで話し合いポスタープレゼンテーションに挑戦した。

【私立大同高級中学との交流活動：生徒の感想】

・英語でコミュニケーションをとることは難しかったけど、何とか言いたいことが通じたこともあってとても楽しかった。また台湾の学校を見学できたこともいい経験になった。

・台湾の高校生たちの英語が上手すぎた。もっと英語をできるようにならなくてはと思った。もっと交流の時間がほしかった。

・すごく不安だったけれど台湾のみんなは積極的に話しかけてくれて楽しかった。英語を文章で話すだけでなく、単語やジェスチャーだけでも伝わってよかった。

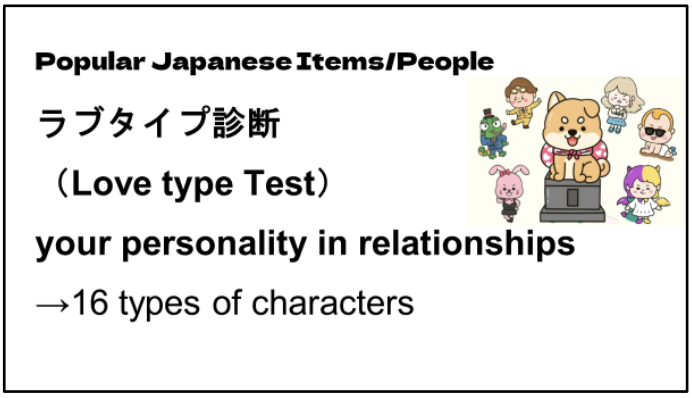
・最初の自己紹介、自分の老化した姿を通して簡単な英語で感想を話すことができ緊張もほぐれた。しかし、ポスタープレゼンテーション準備では、内容をうまく共有できなくて同じ言語の者同士で話を進めてしまうことがあった。自分の英語力をもっと高め自信を持って会話することが何より必要だと感じた。

・相手のことをもっと知りたかったのに、それをすぐに行動に移せなかったことがとても悔しかった。どんどん質問できるようにしたい。

（３）対日理解促進交流プログラム　カケハシ高校生オンライン交流プログラム

今年度は、オンラインで University of Illinois Laboratory High School（通称ユニハイ）と計２回交流することができた。アメリカで日本語を学習している生徒たちと日本語、英語を交えての交流会となった。第１回目のオンライン交流会では、お互いの学校や地域紹介に始まり、おすすめ／おもしろい日本語（英語）紹介、高校生の間で流行しているものや人について、日米高校生活の比較などについて情報交換しながら交流した。

第２回目のオンライン交流では、生徒たちは自宅から交流会に参加した。自宅から Zoom を通じた交流により通信環境が改善され、スムーズに接続できたため、相手の音声が聞こえない等のストレスをあまり感じることなく、交流そのものに集中できた。２回目の交流では、即興での「やりとり・対話」を重視した交流にするため、スライド等は準備しなかった。会話が途切れてしまったとき用の質問や話題はいくつか事前に準備したが、できるだけ「やりとり・対話」を続けていくことを目標に、自由な交流スタイルを選択した。自分の部屋にあるもの・カバンの中に入っているもの・普段食べているものや日本の住宅・部屋など実物提示するなどしながら、日本の高校生の生活を言葉だけに頼らず様々な工夫をしながら伝えるよう事前指導した。学校で使っている教科書や、部屋の中にある漫画本などを見せながら Show&Tell のような形で交流するグループも見られた。



【オンライン交流活動：生徒の感想】

・リアクションをして相手が話しやすい状態で聴くことができたと思う。難しく考えないで、とりあえず質問などをしてみることが大事だとわかった

・趣味を話題にしたら同じ趣味だったので盛り上がった。また、同じグループの子が聞こえづらそうで困っていたので教えてあげることができた。交流活動を通してとにかく会話を沢山繋げることが大切だと思った。

・お互いの国のアニメや音楽などを話題にして交流した。好きな音楽や映画、将来の夢など、国は違っても共感できる話題が多く、話が膨らんだ。単語を並べるだけでも相手がうなずいてくれたり、ゆっくり言い直してくれたりして、コミュニケーションできた。一人の人としてリラックスして接することの大切さを学んだ。

・好きなスポーツや好きな科目などを聞いて、相手が答えてくれたことに反応したり、軽くグループ内での対話を進行したりすることができた。下手な英語でも雰囲気や手振り身振りなどを使ったら意外と伝わることが分かった。これからの交流の際は同じ話題について会話を広げられるようにしたいと思った。

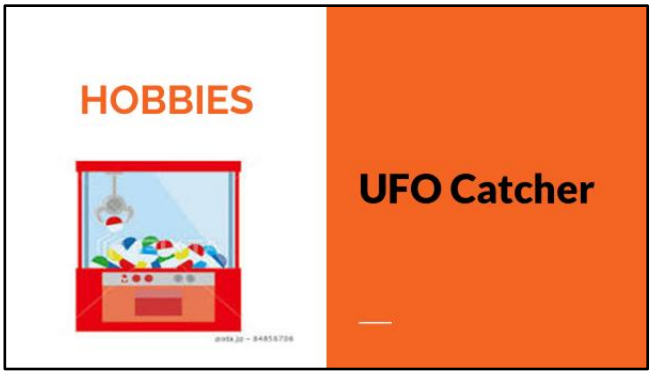
２．由利高グローバルチャレンジ

〇１日目　９月２日
・講義テーマ１「秋田大学生による地域活性化活動」
　秋田大学教育文化学部　地域文化学科　准教授　益満　環氏
・講義テーマ２「地域コミュニティの変容と人々のコミュニティへの関わり」
　秋田大学教育文化学部　地域文化学科　教授　石沢　真貴氏
〇2 日目　９月３日
・由利本荘市内の ALT との異文化交流プログラム。Interview &Presentation や Small Discussion など
〇3 日目　９月４日
・秋田大学キャンパスツアーと模擬授業

今年度のグローバルチャレンジ１日目は、秋田大学教育文化学部の先生方による特別講義を受講した。今年度の探究活動と関連付けて、秋田大学の学生が地域のためにどのような活動をしているのかを具体例を通して学び、自分たちの地域の課題や若者の地域への関わり方について考えることができた。また社会学の観点から、少子高齢化や都市化などによって変わりつつある地域コミュニティの現状を知り、人々がどのように地域と関わっているか、今後地域社会を持続させていくためには住民たちはどのような意識を持つことが必要なのか、といったことについても学んだ。

グローバルチャレンジ２日目は、由利本荘市内のＡＬＴとの異文化交流プログラムを実施した。グループに分かれて、ＡＬＴにインタビューを実施し、その情報をもとに担当ＡＬＴについてプレゼンテーションをする活動や、与えられたトピックについてディスカッションする活動などを行った。今回の活動では、事前に用意した質問に加え、一つの話題を参加者同士で広げながら対話することで、より深い情報を得られることを学んだ。また、相手の発言に対するリアクションの大切さに気付き、双方向のやり取りが交流を活性化させることを実感した。

【ALT との交流活動：生徒の感想】
・自分のグループの先生にインタビューするときは、用意していた質問を順番にするよりも、１つの話題についてみんなで会話しながら質問していくとより詳しい情報を得られて、会話も盛り上がったように思った。
・質問をした後、その話題をもっと膨らませられたらよかったと思う。セシリア先生が「あなたはどう？」「いいね」と反応をみんなにしてくれたので、私もリアクションもちゃんとするようにしたい。
・アメリカの卒業式の写真を見せてもらった。SNS でよく見かける光景で、感動した。特にプロムの話はとても楽しかった。私は海外の高校生活をしてみたいと思っていたけど、セシリア先生は日本の高校生になりたかったと話していて、違う視点があれば惹かれるものも違うと思った。
・ALT のリリアナ先生が、みんなの意見をしっかり聞いてくれたり、場の雰囲気を盛り上げてくれたりして楽しく交流できた。
・私たちのグループのプレゼンテーションが１位だったのがうれしかった。スライドに載せる絵や写真、文字の文量を工夫して情報が伝わりやすいようにしたのが良かったと思う。



グループディスカッションに挑戦！

英語で意見を伝えてみよう

【秋田大学による講義：生徒の感想】

・社会学担当の先生による地域コミュニティに関する講座では、初めて聞く言葉がたくさんあった。しかし感染症や高齢化など身近な課題が、実は世の中のグローバル化と結びついていることを学んだ。都市部と地方では、地域コミュニティの規模の大きさや自治能力において違いがあり、由利本荘市でも若者から進んで問題解決に取り組んでいくことが必要だと思った。

・世界のグローバル化は、地域コミュニティの中の伝統や家庭に影響を及ぼすと分かった。自分たちはどんな地域を理想として、将来この地域にどうなってほしいのかを考える必要がある。

・地域の文化や資源をグローバルな社会でどのように活かしていくのか、具体例を通じて学んだ。

・自由で快適な都市生活は、住民による地域自治の力を弱めてしまう負の側面もあることが分かった。

・グローバル化は様々な利点がある一方で、伝統的な文化やローカル空間の崩壊につながってしまうので、そういったことを食い止めるためにコミュニティの再構築や持続可能な社会に意識を向けていきたい。

・誰にその商品を売り込みたいのか、ターゲットを明確にして、商品特性をターゲットに合った宣伝手法で伝えることが大切だと分かった。
・商品の品質が高くても、その商品を発信する力が足りなければ意味がないことに納得した。
・Three Hits Theory という、消費者はある商品に関する情報に３回接触してその存在を知る・意識する理論などを初めて学んだ。（商品）企画力と情報の発信力のバランスが、街の魅力を発信する上でも大切だと思った。

３．特別講座・高大連携授業

国際科２年生対象
○５月１日　由利本荘市役所出前講座
由利本荘市企画振興部総合政策課　総合政策班長　佐　藤　勇　輝　氏
○５月１５日　「統計」の先にあるもの -統計資料から地域の実情を見る方法
秋田県立大学 システム科学技術学部 経営システム工学科　教授　嶋崎 真仁氏
○６月１９日　由利本荘市役所出前講座２
由利本荘市企画振興部総合政策課　総合政策班　主査　村上　貴宏氏
○９月９日　「異文化理解の氷山」
秋田大学教育文化学部学校教育課程　畠山　研氏
○１１月２０日　「外国語学習の意義と効率的な学習法」について
秋田大学教育文化学部学校教育課程　若有　保彦氏

１年生（来年度国際科選択者）対象
○１２月９日　「AI 時代に必要な英語力とは？」
秋田県立大学　岡崎　弘信 氏
○１月２０日「秋田県における司法通訳・司法通訳者と知的障害者の親なき後問題」
秋田県立大学　坂本　美恵子 氏
○１月２７日「異文化理解と英語の滑らかさ」
秋田県立大学　カルロック・アヴァンツィ 氏

今年度２年生の総合的な探究の時間では、「地域の課題解決」を学年・学科共通のテーマに設定した。そのため、探究学習をより深められるよう由利本荘市役所の出前講座や、県立大教員による講義などを受受講した。市の人口動態や移住・定住の現状、国際交流事業、多文化共生の取組について理解し、地域には多様な背景をもつ人々が暮らしていることを知った。また、グローバル化と地域コミュニティの関係、地域資源の活かし方、情報発信の重要性などを学び、地域の一員として自分にできる行動を考える機会となった。

秋田大学の教員による、異文化理解や外国語学習に関する講座では、生徒は異文化理解には先入観にとらわれず、知識や常識を更新し続ける姿勢が重要であることを学んだ。また言葉や表現の意味が文化や社会的背景によって異なることに気付き、外国語や言葉の表面的な理解にとどまらず背景まで考える視点が育まれた。

今後も、授業や探究活動等の際には日本語や英語による対話活動を継続的に取り入れ、相手の立場や背景を想像しながら考える力や思いやりの姿勢を育成していきたい。また、物事の表面だけでなく、その背景や文脈を読み取ろうとする姿勢を重視し、国際理解を英語圏に限定せず、多様な地域の歴史・文化・価値観に触れる学習を継続し、広い視野で世界を捉える態度を養っていきたい。

【市役所出前講座：生徒の感想】
・由利本荘市に３００人以上の外国人の方が住んでいることに驚いた。また海外の４つの都市と交流があることや、コロナ禍では支援物資をおくっていたことを今回初めて知った。外国人向けのイベントや支援などが行われていることが分かったので、自分もボランティアスタッフとして参加できるものがあれば参加してみたい。
・国際交流は、意外と身近なものだと思った。市内在住の外国人の数も年々増加してきていると聞いて、今後様々な人たちと共生していくことが今まで以上に大切になってくると感じた。
・「やさしい日本語」というものに興味をもった。公共の看板や案内書きなどのやさしい日本語について、外国人移住者の人たちはどのように感じているのか知りたいと思った。
・昨年度は中国の学生やハンガリーの方々との交流をして、文化や価値観の違いを直接体験できて勉強になった。また書道での交流を通じて、外国人の方々の反応を見るのがとても楽しくて、これからも由利本荘市でこういった外国人の方々との様々な交流機会が増えていけばいいと思った。

【秋田大学高大連携授業：生徒の感想】
・「偏見」を生まないためには、知識や常識を常に最新のものにしていく必要があることを学んだ。
・イギリスで「お茶をしましょう」という表現は、通常の食事をすることを意味していることや、裕福な階層の人と貧しい人とでは、意味が変わってくることが興味深いと思った。
・異文化理解の難しさや大切さを知った。文学作品を読んだとき「作者が言葉などで明確に描いていない、表現していない部分は自分たちで考察したり、解釈したりする」という行為は、異文化理解と似たような性質を持つ、という部分が私にとって新しい発見だった。
・先入観だけで相手の国のことを判断するのではなく、本やインターネットなど様々なツールを活用して情報を取り入れて、常識の変化についていけるようにしたいと思った。
・異文化について知るためには、対話やコミュニケーション、思いやり、想像力が大切だということが分かった。
・多くの日本人は外国＝米国という考えがあるが、国際理解≠米国理解ではないということを改めて理解することができた。他にも、日本語だけ学んでいては入ってこない情報もあるということにも気づいた。
・今回の授業で、国際理解というとアメリカやカナダなどの英語圏ばかり思い浮かべてしまうけど、それだけではなくアジアやアフリカ、北欧などそれぞれの国について理解することだと気付かされました。それぞれの国によって生活も常識も伝統も違うので、国際理解を学ぶことで国同士を比較して、相違点や共通点を見つけられたら楽しいだろうなと思いました。
・国際理解を通して異なる言語、文化を知る楽しさを学んだり、常識や価値観を見直したりしていきたいです。
・国際理解とは何かやその意義を学ぶことができた。単に英語を学ぶのではなくその背景や歴史を学ぶことも大切だということが分かったので、これからの学習に取り入れていきたいと思った。

酒宴に見る『宋史』列伝の人物たち

国語科　坂本　公正

はじめに

『宋史』列伝の原文読解は 9 年目を迎えている。今年度（2025）は 263 巻から 264 巻までの 19 人を読了した。これまでの総計は 163 人となるが、人物の評価には幾つかの型がある。よい部分として孝行、質素倹約、善政などがある反面、悪政や傲慢な人物として描かれる者もいる。偶々今年度 2 年生の授業で司馬遷の「鴻門の会」を扱ったこともあり、この教材で登場する宴会、すなわち酒宴をテーマとして以下に述べてみたい。

出典と扱う時代

『宋史』とは中国二十四史の一つで元王朝の 1345 年に完成している。ちなみに「宋」とは 10 世紀に成立した北宋・南宋を指す。全 496 巻のうち列伝は 255 巻を占めている。

また唐滅亡から北宋成立までの王朝の変遷を示すと次のようになる。

唐滅亡（907）→①後梁（907～923）→②後唐（923～936）→③後晋（936～947）→④後漢（947～950）→⑤後周（950～960）→北宋（960～1127）

今年度読了した 19 人

以下に各人物の生没年も含めて挙げてみる。このうち傍線部がここで取り上げる人物である。

① 李穀（902～960）②竇儀（913～966）③弟：儼（918～960）<u>④弟：偁（924～982）</u>⑤呂餘慶（926～976）
⑥ 劉熙古（902～976）⑦子：蒙正（929～1001）⑧子：蒙臾（934？～982）⑨石熙載（927～984）
<u>⑩子：中立（971～1038？）</u>⑪ 李穆（927～984）⑫子：惟簡（？～1020）⑬弟：粛（？～？）
⑭薛居正（911～981）⑮子：惟吉（954～996）⑯沈倫（908～987）<u>⑰子：継宗（957～1012）</u>
⑱盧多遜（933～985）<u>⑲宗琪（916～996）</u>

＊⑨と⑪は生没年が偶然同じであるが誤植ではない。

同僚を責める　④竇偁

まず始めに酒席で同僚に厳しくあたる場面を取り上げたい。竇偁は北宋初期の文人。兄の竇儀は太祖から信任を得た剛直な人物としても知られた。以下に原文を挙げる。

◆は原文、■は書き下し文、◇を口語訳とする。

◆時賈琰為推官、偁不楽其為人。太宗嘗宴諸王、 偁、琰与会、琰言矯誕、偁叱之曰「巧言令色、心不独愧乎！」。上愕然、因罷会、出偁為彰美軍節度令官。

■時に賈琰推官と為り、偁其の人と為りを楽しまず。太宗嘗て諸王を宴し、 偁、琰と与に会ひ、琰矯誕を言ふ、偁之を叱して曰はく「巧言令色、心に独り愧ざらんや！」と。上愕然として、因りて会を罷め、偁

を出だして彰美軍節度令官と為す。

◇この時賈琰は推官となったが、竇偁はこの人物の性格をよしとしなかった。太宗は以前諸王と宴会を開き、竇偁や賈琰も同席した。賈琰が出自を誇らしげに語った時、竇偁がこれを責めて言うには「口先がうまく表情も和らげ人に気に入られようとする人に仁心はない。おまえは自分で恥ずかしくないのか。」と。太宗は非常に驚き、そうしてこの宴会は取りやめになった。(その後) 偁は転出して彰美軍節度令官となった。

「矯誕」は「自らの出自を誇る」と解した。「巧言令色」は『論語』の「学而」「陽貨」に二度出てくる言葉で「鮮いかな仁」を補って訳のようにした。余程、竇偁にとって賈琰は気に入らない人間だったのだろう。天子の面前であっても飲酒した高揚感がそうさせたのか。この態度と発言は兄竇儀譲りの剛直さから出ているのかもしれない。

相手が酔うまで帰さない　⑩石中立（せきちゅうりつ）

何も堅苦しいばかりが酒の席ではない。次の石中立は北宋前時の文人。父石熙載は親孝行として知られ、政治の場において善人を薦めたとされる。その息子中立の話である。

◆喜賓客、客至必与飲酒、酔乃得帰。

■賓客を喜び、客至れば必ず与に飲酒し、酔ひて乃ち帰るを得たり。

◇石中立は賓客を喜び、客が来ると必ず一緒に酒を飲み、相手は酔ってやっと帰ることができた。

短い文ではあるが客が来た時の中立の嬉しそうな表情や相手に何度も酒を勧める様子が伝わってくる。父熙載は人を見抜く力があったとされており、もしかしたら中立も飲酒の場においてその人物の本性を見抜こうとしていたのかもしれない。

本人は下戸でも酒席を設ける　　⑰沈継宗（しんけいそう）

「鴻門の会」の樊噲は大杯につがれた酒を一気に飲み干す。酒席ではそうした場面を思い浮かべがちだが、一方酒宴において酒を飲まない者もいる。沈継宗はこれも北宋の文人。父は沈倫と言って宰相をつとめた当時の権力者である。その息子が継宗である。

◆（継宗）不飲酒、不嗜音律、而喜接賓客、終日宴無集倦。

■（継宗は）飲酒せず、音律を嗜まず、而れども喜びて賓客と接し、終日の宴集ひて倦むこと無し。

◇（継宗は）酒を嗜まず音楽も嗜まなかったが、好んで賓客と接し、一日中酒宴を開催して飽きることがなかった。

宰相を父にもつ継宗の元には黙っていても人が集まってきたと予想され、本人もそのことを自覚しており、進んで人々の輪に入っていこうとしたのかもしれない。彼にとって酒は人間関係を円滑に進める上で最適なコミュニケーションツールであったのだろう。

この継宗は父の諡（おくりな）を巡って当時、一悶着を起こしたと列伝は伝えている。父が亡くなった時、「恵恭（けいきょう）」が諡されようとしていた。しかし継宗は「文」の一字を入れるべきだと主張する。参考までに諡の中でも「文」は最高級であり、後代の司馬光は「文正」、王安石は「文公」とそれぞれ諡されている。結果は元のままであったという。身内の功績を誇ろうとするきらいもあるが、継宗はただ歓楽にふけっているような人物ではなく、自らの価値観や信念をもって生きた人物であったとも言えよう。

天子に年齢を尋ねられる　⑲宋琪（そうき）

私が今年度、読解で最も長い時間を費やしたのが宋琪である。9 月下旬から 12 月にかけて実に 3 ヶ月に

及んだ。燕の出身であるこの人物は異民族である契丹の情報に詳しく、そのため列伝では契丹政策の進言の詳細がこと細かく描かれている。ここでは宋琪の晩年の宴席の場面を取り上げる。

◆至道元年春、大宴於含光殿、上問琪年、対曰「七十有九。」。上因慰撫久之。

■至道元年春、含光殿に大宴す、上琪の年を問ふ、対へて曰く「七十有九なり」と。上因りて慰撫すること之を久しくす。

◇至道元年（995）の春、含光殿で盛大な宴会があり、太宗は、年齢を尋ねた。答えるに「７９歳です。」と。太宗はこれを聞いて彼を長い時間慰労した。

太宗が長年勤めた家臣の年齢をわざわざ聞くとは、この時点で彼は第一線を離れてしばらく時間が経過していたと推測される。あるいは太宗は年齢を把握していたが、本人との対話を円滑にすすめるためにそうしたのかもしれない。いずれにせよ、公式の場で天子が長時間の慰労をしたことは宋琪にとって大きな喜びであったと思われる。

結言

これまで述べてきたことを以下にまとめてみたい。酒席という普段よりも弛緩した場において様々な人間模様があることを述べてきた。時に率直に、またはお互いの心を通わせるものとして各人物の個性や特徴が短い文章の中にも表出されていた。余談になるが、今回登場した４人のうち父や兄の記録のあとに登場したものが 3 例。業績が多岐にわたる有力者の父兄と比べて息子や親族の場合、幾分事績に欠き、そのためプライベートな記述が採用されたのかもしれない。

ちなみに 263 巻末尾の人物評のまとめには「藹然（あいぜん）」や「承平」の語が見られる。「藹」とは「おだやか、和らぎ」、「承平」は「平和の世が長く続くこと」を意味する。

酒席は五代や北宋初期の動乱の中でも多くあったはずである。特にこの時代、徐々に平和になっていくに従い酒席の雰囲気も変容したのかもしれない。今稿ではそれを指摘する根拠や材料に乏しかったことを遺憾とするものである。

この『宋史』原文読解は個人で進めている作業だが、少しでも授業に還元し、今後も歴史に埋もれてしまっている個性あふれる人物を求めていきたい。

参考文献

『宋史』維基文庫　自由的図書館

石本道明　青木洋司『論語　朱熹の本文訳と別解』　明徳出版社　（2017）

小林義廣　『王安石　北宋の孤高の改革者』　山川出版社　（2013）